

巻

ただ静寂だけがそこにあつた。

日が昇るまでもう幾許か。夜の者はとうに寝静まり、昼の者は未だ夢の中。風もまた眠つてゐるのか、僅かな空気の揺らぎさえもない世界はおよそ現実感のない、縁取られた絵画のようだった。

そんな中で一つだけ、ここが時の止められた額縁の中ではない事を示すように動く影がある。魂魄妖夢、冥界は白玉楼に住まう半人半霊の少女だった。

年の頃は人間に例えるならば十を超えようかというところだろうか。顔立ちも幼く、童女にしか見えない妖夢ではあるが、およそ自身の背丈ほどもあろうかという長刀をいとも容易く振り抜く様は、彼女が人外の者であるという事を思い起こさせる。

半人半霊、幽霊と人間という二つの資質を併せ持つ種族。半分は人間だと言われているが、そうだとしてもやはり妖の類に通じるものがあるのだろうか。

「ッ!!」

叫びにも似た呼気と共に横薙ぎに払われた刀身が、薄く広がる朝霧を切り裂く。しかしそれは一閃に留まらず、転瞬の間に幾筋もの鈍く輝く軌跡を描いていた。

構え、踏み込み、斬り、即座にまた次の初手へと流れるように移る一連の動作。それだけを見れば、一人で行う形稽古となら変わりはない、剣の稽古としてはごくありふれたもの。

しかし妖夢の行うそれはあまりにも速い。一の太刀を視認した時には、既に二の太刀どころか三の太刀が振るわれている。それもまた人外の者だからこそ成し得る業なのか、それとも修練の果てに体得したものなのか。どちらにしても、少女の体軀から繰り出されるとは到底思えぬものだった。

「……こんなところかな」

おおよそ一通りの形は終わったのか、引き摺り^{ひきず}りそうなほど長い鞘に器用に刀身を納めて、妖夢が張り詰めていた気を解きほぐすように呟いた。

何気なく空を仰いでみれば、いつの間にか随分と白んできている。未だ太陽は山裾の向こうに隠れているが、すぐにも姿を現すだろう。

——些^{いささ}か遅れてしまったか。

内心多少の焦りを感じて、妖夢がその場に一礼して踵^{きびす}を返す。

日が昇れば幽々子が目覚める。とはいえ妖夢に何か仕事がある訳ではない。身の回りの世話も朝餉^{あさかじ}の支度も、それぞれ担当となる幽霊達が行っている。そんな中で妖夢の役割はといえば、遅れずに朝餉の席に着くという程度のもの。

それでも、と妖夢は思う。

白玉楼の当主格である幽々子に仕える身であれば、そして正式な役所でないとはいえ、側役のような立場であるのならば、たとえ自分に仕事がなくとも常に傍らで控えておくべきだと。

もつと気楽にしていいたと言われた事もあつたが、元来の生真面目さ故か妖夢が改まるようなことはなく、いつしか幽々子も何も言わなくなつていた。

認めてくれたのか、それとも単に呆れただけなのか。

「よ、つと」

小走りに屋敷へと続く道を進んでいく中で、不意に妖夢の身体が横へと逸れた。手入れもあまり施されていらない一角。道としては通っていないが、単純に屋敷への距離だけを考えると、普通に戻るよりかは近道になる。

背丈の倍はあるうかという大岩の上へと難なく飛び乗り、躊躇うことなく飛び降りる。そのまま勢いを殺すことなく駆けながら、しかしこの道を選んだのは少し失敗だったかと、妖夢が整った眉を顰めた。

長い間放置されていたその場は草が生い茂り、長い物は膝元まで伸びてきている。それだけならば特に苦にすることもないのだが、夏場とはいえ遙か上空に存在する冥界の朝は、地上に比べれば随分と冷える。その上今朝は霧がかかつていたりもしたものだから、足下の草には満遍なく露がおりていたのだ。

「幽々子様の部屋に行く前に着替えないと駄目かなあ……」

足下だけならまだしも、気付けばスカートの裾も幾らか濡らしてしまっている。どうしたのかと考えたところで既に道半ば。ならばと妖夢は一層地を蹴る足に力を込めた。

着替える時間を考えれば、近道などせず普通に戻った方が余程早かっただろう。

いつもそうだ、と妖夢は呆れたように溜息を吐いた。よかれと思つてやった事が、後になつてみればただの空回り。二つ先を見越して一つ先を見落とす。あるいは一つ先だけ見すぎて二つ先で躓く。その都度もう少し要領よく考えられるようになれないものかと思うが、残念ながら今回もまたやつてしまったようだった。

「こんなことでは——」

自分はまだまだ未熟だと、妖夢はそう思っている。しかし同時にそれを言い訳にはしていないという事も強く思っている。未熟だから仕方がない。半人前だから、慣れていないから、そんな事は実戦では理由にならないのだ。

祖父の妖忌が行方をくらませてから早数年。それは妖忌が担っていた西行寺家の庭師兼幽子の警護役を、妖夢が引き継いでからそれだけの年数が経ったという事。

庭師としても警護役としてもまだまだ半人前。しかし庭師はまだしも、警護役の方は少なくとも妖夢が任に就いてからはまだ一度もそれらしい場面が訪れた事はない。一番それに近い事態として、先に幽々子が起こした通称春雪異変と呼ばれるものがあつたが、それも弾幕ごっこ、そしてスペルカードルールという意地と矜恃を賭けた、けれどあくまでも平和的な解決策が採

られていた。

そんな命のやりとりでさえも擬似的な方法に置き換えられる世の中、そうなればますます警護役というものの必要性が疑われるが、いつ何時、何が起こるか解らないというのもまた今の世の中なのだ。

「そうだ、あの時だって」

呟いて、妖夢が足を止める。

足下や服に朝露がじんわりと染みこんでいくのも気に留めず、一点を見据えたまま動かない。生い茂る草の先、立ち並ぶ木々の向こう。そんな事を考えていた所為か、それともこの場所に近付いたからなのか。気付けば自然と足が向いていた。

手入れのされていない場所という点では辺り一帯と同じであるものの、草も木々も明らかに少ない、開けた場所。

その中央に、何か巨大な物が通り抜けたような跡がある。

地面は抉れ、その先にある大木はとてつもない力で押し倒されたかのように根元から折れていた。

「
」
今もまだ倒れたままにされている大木を睨むように見ながら、妖夢が地面に残された痕跡の始まりの場所に立つ。

φ

「で、その有様というわけか」

「いやあ、見てみるとどれも欲しくなっちゃってしまつて」

テーブルの上に置ききれず、足下にも所狭しと置かれた袋や包みに囲まれて、妖夢が恥ずかしそうに頬を掻いた。

里の外れにある小さな菓子屋。その店内に設けられた椅子に腰掛けて、妖夢は改めてほうと一息。食べ物置物飾り物。見れば見るほど多種多様な物が揃っている。幻想郷で営む店を全て巡ったのではないかとも思えるその量に、今になって少々やりすぎたかもしれないと思つたが、手近にあつた小さな花の髪飾りを手に取ると、そんな思いもすぐに霧散していった。

「また随分と可愛らしい物だなあ」

溜息交じりに言いながら、向かいに座つた少女がずず、と湯気の昇る茶を啜つた。

なんでこんな暑い日にそんな熱いものを、と聞いてみれば、彼女——上白沢慧音はそんな暑さも熱さも微塵みじんも感じさせない涼しげな顔で「暑い時こそ熱いもの、だ」と、お婆ちゃんの知恵袋みたいなことを返してきた。

妖夢が彼女に出会つたのはただの偶然。いい加減荷物が持ちきれなくなつてきたので、一休

みしようと手近な店に入ったところ、先客として慧音の姿があったというだけのこと。店内は並ぶほどでもないが、そこまで余裕も無い状態。それを見越した慧音が、顔見知りとするや妖夢を自分の席へと呼び寄せたのだ。

「似合うといいいのですが」

「いいんじゃないか？ 私はよく似合うと思うよ」

不安そうに眉尻を下げる妖夢に、慧音は率直にそう言いつつ、改めて手元のそれを見る。

白い花の髪飾り。慧音が付けるには少々少女趣味が過ぎるかもしれないが、妖夢であれば良い具合にワンポイントになるだろうと思っただのだ。妖怪だ辻斬りだと言われても、慧音から見ればまだまだ見た目同様の若い少女でしかない。こういう小物に興味があるのかと少なからず驚きはしたものの、同時に安堵した部分もあった。

「ですよね！ こういう物も似合うと思うんですよ、幽々子様」

「そっちなか!？」

思わず持っていた湯飲みを落としそうになった慧音を見て、妖夢が「およ？」と不思議そうな顔をした。自分の言っている事に何もおかしいところはないと、本気でそう思っている顔だ。

「……ひょっとして、他のも全部、か？」

恐る恐るといった様子で、大量に置かれた包みや袋を見て慧音が言う。

大小様々な荷物は、食べ物以外のどれもが幽々子という亡霊嬢のイメージとは真逆に思える

ものばかり。しつかりと包まれているものは中身までは解らないが、それでも里の事は知り尽くしているといつてもいい慧音にしてみれば、包み方や袋を見ただけで、その店がどんな物を取り扱っているのかくらいはすぐに解る。

「それはまあ、自分の物を買っても仕方がありませんし」

「不憫な……!!」

妖夢からしてみれば、どうしてそんな事を聞かれるのか解らないといった風だったが、何かを思い出したのか、あつと声をあげて、

「そういえば一つだけ、私の物も買ってしまいました」

勝手にお金を使うと怒られるんですけどね、と言いつつ、それでも嬉しそうに荷物の中を探す妖夢を見て、慧音は溢れ出そうになった涙をぐつと堪えた。

「これはです。中々良い物が手に入りました」

「……布？ 服でも仕立てるのか？ それにしては少々足りなさそうだが」

「ああいえ、食卓などで使う台拭きが最近どれも古くなってしまったので、それに。雑巾なら適当な物でもいいのですが、台拭きにするならやはりこういった綺麗な物の方がいいかと思ひまして」

「不憫な……!!」

堰を切ったかのようにさめざめと涙を流す慧音を見て、妖夢はやはり「およ？」と不思議そ

うに首を傾げた。

「いや、うん、すまない。お前がいいならそれでいいんだ。元より私が口を出す事でもないだろうからな」

「なんの事だか解りませんが、とりあえずありがとうございますと云っておけばいいのでしようか」

依然として妖夢が不思議そうな顔をしていると、ちょうどそこへ店員が小皿を持ってやってきた。愛想のいい声と共に妖夢の前に小皿が置かれる。乗っているのは水羊羹。慧音に勧められた一品だ。

そうなる妖夢も現金なもので、ひとまず疑問は横へと置いて、早速添えられていた黒文字を手にとった。透き通るような瑞々しさは、それだけで涼やかな気分させてくれる。黒文字を当てて音もなく切り分けると、慧音がほう、と感嘆したように呟いた。

「やはり剣士というべきか。見事な切り口だな」

「羊羹を切るくらい、誰がやっても変わらないと思いますけど……」

む、と眉根に皺を寄せた慧音に、羊羹を一口頬張りながら妖夢が返す。冷たさの残る羊羹は、口に入れただけでも全身を涼やかにしてくれた。もう少し甘い方が好みだったが、それでも十分美味しいと思える一品。しっかりと味わってから礼の言葉を口にする、慧音は「いやいや」と首を振った。